

帰化植物ノート(7) (浅井康宏)

Yasuhiro ASAII: Miscellaneous Notes on the Naturalized Flora of Japan (7)

近年、種々な経路で新たな外来植物が我が国へ侵入しているが、今回は東京湾沿岸地帯の新造成地（いわゆる埋め立て地）や、各地の湾岸地域などを中心に見出されたものを記録しておきたい。なお本稿をまとめるにあたり、興味ある資料および貴重な写真を提供され、検討の機会を与えられた斎藤吉永、水田光雄、蓮見和子の諸氏、ならびに種々御援助いただいた小山鐵夫博士に深謝する次第である。

15) ヒメムラダチヒルガオ（新称）

最近、兵庫県神戸港の荒れ地（神戸市中央区港島）で、同地域の外来植物の調査に精力的に取り組まれている水田光雄氏が、1994年6月に変わったヒルガオ科の一品を見出された。筆者も同氏の同道を得て現地を訪れ、実際の生育状態を観察（1994. 7. 15）することが出来たが、花のないものを見るとハリゲタビラコの瘦長なものを思わせる外観をもつ。

白色の長粗毛に被われ、淡灰緑色を帯びる多年草で、木質化した基部から長い鞭状の多数の茎を直立、叢生させ1mほどになり、大きな株をつくる。茎は円柱形で基部は径5mm内外、中部の葉腋から枝を開出させる。葉は互生し、下部のものは線状披針形でやや鈍頭、長さ7cm内外、幅4mmほど。上部のものは卵状披針形で尖頭、長さ3.5cm、幅7mm、多少波状をなし無柄。夏、上部の葉腋から3cmほどの長柄を伸ばし、先端に1~5花を散形につける。萼は有毛で5裂し、6mmほどで先端は細まり、葉状となり緑色、尖頭。花冠は淡桃色で径1cm内外、杯状に平開し、アサガオカラクサ（*Evolvulus*）のそれに似ている。なお、水田氏の観察によれば、結実は見られないとのこと。

手元の文献をもとに検索を試みたところ、地中海の東部沿岸を中心とした地域（エジプト、イスラエル、レバノン、シリア、トルコ、イラク、イラン、アフガニスタンなど）に生育する *Convolvulus pilosellifolius* Desrousseaux in Lamarck, Encycl. Méth. Bot. 3: 551 (1789); Post, Fl. Syria,

Palest. and Sinai 2: 207 (1933); Kitamura, Fl. Afgh. 311 (1960); Davis, Fl. Turkey 6: 209 (1978); Heller et al., Conspect. Fl. Orient. 3: 55 (1986)であることが判った。

和名はやはり地中海沿岸地方に生育する本種に近縁の *C. cantabricus* L.（ムラダチヒルガオ）に似て、花が小さいことから「姫群立ち昼顔」と呼ぶことにしたい。なお現状では極めて局部的であるとはいえた定着帰化の状態にあるが、しかし埠頭という人為的影響を受けやすい環境下に生育するため、予備帰化見習い程度で終わる可能性がある。

恐らく同港に荷上げされたコンテナに随伴して、原産地域から持ち込まれたものであろう。我が国では見られない変わった草姿をした植物であるが、この仲間のものとしては花も貧弱で、全体に粗い毛の生えた見ばえのしない全くの雑草然とした代物である。

16) ヒメツルウンラン（新称）

長年にわたり興味ある外来品の存在を明らかにされてきた斎藤吉永氏が、千葉県成田市北須賀で、葉形だけみるとセイヨウヒルガオを貧弱にしたような一草を採集された（1992. 8. 18）。我が国でも最近、各所で見られるようになったツタバウンランに似ているが全草が多毛で、より纖細な茎を伸ばし小さな仮面状花をつける。

一年草で茎は基部で多数分枝し、蔓状に拡がり1m以上になり、白色の長開出粗毛に被われる。葉は濃緑色で互生し、広卵形～略三角形（戟形）、尖頭、全辺で長さ1~3cmほど。葉の基部近くに1~3の低鋸歯をもち、耳状となる。葉柄は短く長さ5mm。6月ごろから秋にかけて葉腋に各1花をつける。花梗は纖細な糸状で長さ2cm内外。萼は卵状披針形で5深裂し、尖頭。仮面状花冠は長さ6mmほどで淡黄色、上唇は紫色、距は直すぐで白色、長さ4mm。果実は略球形で萼に包まれ、脱落性の蓋を持つ。草姿の割に大きな果実をつけた様子は、ツタバイヌノフグリ（フラサバソウ）のそれを思わせる（Fig. 1）。

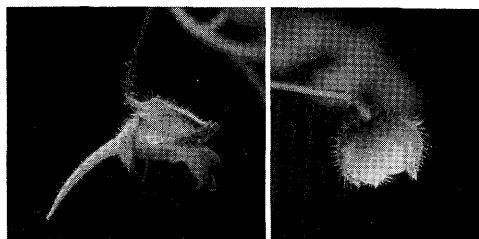


Fig. 1 Flower (left) and fruit (right) of *Kickxia elatine* (L.) Dumort. (Photo by the courtesy of Mr. Y. Saito, Aug. 18, 1992)

これを近似種を含めて詳細に検討を加えた結果、採集者の斎藤氏も筆者あての書信などで触れておられるように、ヨーロッパ原産の *Kickxia elatine* (L.) Dumortier, Fl. Belg. 35 (1827); Tutin et al., Fl. Europ. 3: 238 (1972); Sutton, Revision of tribe Antirrhineae 174 (1988)—*Antirrhinum elatine* L., Sp. Pl. 612 (1753) と同定した。

原産地では畑地や荒れ地に生える全くの雑草だが、サンシキスミレを思わせる黄色と紫の彩りをした小花は可憐である。現在、北アメリカの湿砂地をはじめ各地に帰化している。

Kickxia 属には約30種が知られているが、本種は本属のタイプとされたもので、これを広くウンラン属に含める場合には *Linaria elatine* (L.) Miller (1768) となる。ちなみに本種の和名としては、その葉形からホコガタウンランが適當と思われたが、近似種との関連を考慮して上掲のものを選んだ。なお今回のものは斎藤氏が考えられたように、印旛沼畔の土手の改修工事に随伴して使われた、輸入の緑化用種子に由来するものであろう。

17) ヒナウンラン (新称)

数年前からウンラン様の小さな花をつける小草の存在が気になっていた。全体に顯著な腺毛がある一年草で、細い茎は直立、多少分枝し、筆者の観察した生品 (1993. 7. 3 千葉市稻毛海岸産) では高さ10~20 cmほど。上部の茎など (花梗や萼も含めて) は、暗紫色を帯びることが多い。葉は線形~卵状披針形、全辺、鈍頭、長さ1~2 cmほどで互生するが、下部のものは対生する。葉腋

から長さ1 cm内外の細梗を直立させ、1花をつける。萼は線状披針形で鈍頭、長さ3 mmほど。花冠は仮面状で長さ5~6 cm。上唇は淡紫色、下唇は2裂し白色、距は1.5 mmほどで濃紅紫色に染まる。果実は卵形 (略球形) で長さ5 mm。

これを種々検討した結果、ヨーロッパ原産の *Chaenorhinum minus* (L.) Lange in Willk. and Lange, Prodr. Fl. Hisp. 2: 577 (1870); Tutin et al., Fl. Europ. 3: 226 (1972); Sutton, I. c. 118 (1988) — *Antirrhinum minus* L., Sp. Pl. 617 (1753) と同定した。現在、アメリカ合衆国東北部やカナダなどにも広く帰化していて、主に鉄道沿線の荒れ地に生育し、いわゆる railway-ballast weed の一員として知られている。したがって現在の交通事情などから、我が国への侵入は二次的な生育地である北アメリカからと考えられる。

ところで British Museum (Natural History) の David A. Sutton 博士の労作であるこの仲間の Revision (1988)などをみると、本種はいくつかの亜種に分けられている。しかしここでは従来の筆者の見解 (本誌 55: 29, 1980) にしたがい、種のランクとしての扱いに止めておく。なお本種を広義のウンラン属に含める場合には、*Linaria minor* (L.) Desfontaines (1800) となる。

本種は文献によると、生育の良いものでは30 cm以上にもなるというが、英名を Small Toadflax と言われるよう一般に纖細な小草故、よほど熱心に探索しないと、他の植物などに混じて見逃されることであろう。恐らく既に各地に侵入し、採集家の目を逃れている可能性がある。

ちなみに本種を北アメリカでも Dwarf snapdragon と呼んでおり、したがって和名としては当初ヒメウンランが適切と考えた。しかしながら戦前、中国東北部や蒙古、東部シベリア地方に産する *Linaria burriatica* Turczaninow に、この名が北川政夫博士 (1939) により既に与えられており、またヨーロッパ産の本属の栽培品にも同名があるので、混乱を避けるため止むなく上掲のものを選ぶことにした。

これに関連して筆者は、従来、我が国に生育の記録が皆無の植物、例えは種々の目的で有用植物として導入、栽培もされず、あるいは帰化植物

(広義)としての記録もまったくない、などといった「外国産の植物」に対して、確かに一面において便利さはあるものの、和名を与えることは是非について、関係者の一考を煩わしたいと思っている。

これにより現在でさえも様々な問題が生じている和名の混乱に更に拍車をかけ、いたずらにシノニムやホモニム(和名の)をつくる元凶ともなりかねない。そして今まで以上に煩雑な既存和名の整理や探索に、研究者が貴重な時間を費やすことは、ぜひ避けたいものである。

斯学の恩師久内清孝先生は晩年、一時的な仮生帰化植物の同定をされても、これらに対して敢えて新和名を創定されなかったのは、いたずらに名前を増加させることによる混乱を避けるための配慮ではなかったかと思っている(淺井: 緑の侵入者, p.277, 1993 参照)。

以上の点は従来、余り俎上にものばらず、些細なこととして扱われてきたきらいがあるが、現在、筆者が携わっている日本帰化植物誌の編纂途上、極めて重要な意義を有することを痛感したので、ここに敢えて触れた次第である。

18) マツバサワギク(新称)

東京都大田区の大井埠頭の路傍で、蓮見和子氏により採集(1994. 6. 11)されたもので、既に同地に数年も前から生育が知られていたとのこと。

全草が濃緑色、無毛で硬く、やや多肉質の多年草で、花がないとヤナギバヒマワリを貧弱にしたような感じを与える。茎は直立し高さ60cmほどで、基部近くで多数分枝し、叢生する。上部の葉腋からも枝を開出し、下部は木質化(径3~4mm)して亜灌木状となる。葉は茎に沿って密につき、長さ4cm、幅2mmほど。表面に多少光沢があり、線状披針形、全辺で互生し、無柄で基部は耳状となり茎を抱く。花期は6月ごろから秋までと長く、茎の上端に散房状に3~6花をつける。頭花は径2cmほどで、舌状花は10個内外、鮮黄色で長さ8mm、幅2mm。同属のノボロギクのよう外総苞片の先端近くが多少褐色を帯びる。種子は褐色で白色の冠毛を持つ。

これをアメリカ合衆国の西海岸、南カリフォルニア地方の海岸砂地(塩性地)に生える *Senecio*

blochmaniae E.L. Green (1893)と同定しておくこととした。

今回、筆者が生品につき観察したところ、本種は折れた茎を水中に挿しておくだけでも、容易に発根するなどといった極めて強壮な多年生のもの故、今後、本州中部以南の沿海地に定着する可能性がある。なお目立った鮮黄色の花と、松葉状の濃緑色の葉とのコントラストは美しく、園芸価値を有するものと思われる。

19) ネバリノボロギク(新称)

これも前記のマツバサワギクと同様に *Senecio* 属の一品で、近年、大規模な埋め立て造成工事が進捗している千葉市幕張の荒れ地で、筆者が見出したもの(1994. 8. 20)である。我が国に広く帰化しているノボロギクに似た一年草で、全草に顯著な腺毛を密布し、粘着する特徴をもつ。

茎は硬く高さ10~40cmほど(原産地では60cmにも達すること)で直立し、多少分枝する。葉は濃灰緑色で互生し、基部のものは倒卵形で有柄、上部のものは長楕円形で無柄。不整に羽裂し、裂片には切込みがあり、長さ3~5cm、幅1~2cmほど(文献によれば生育の良いものでは、長さ10cmにも達する)。上部の葉腋から、散房状に長花梗を伸ばし数花をつける。頭花は径1cm内外。舌状花は濃黄色で長さ5mm、10~15個ほどで、開花にともない反転し、白い冠毛をもつ。

本種はヨーロッパに広く生育する *Senecio viscosus* L., Sp. Pl. 868 (1753)で、現在では北アメリカをはじめ世界各地に帰化し、いわゆる *ballast weeds* の代表者とされている。ちなみに本種に近縁のノボロギクは舌状花をもたないが、原産地では稀に生じるもののが知られている。しかしこれは、舌状花を着ける近似種との間に生じた雑種であると言われているので、たとえ本種の生育の悪いものでも、舌状花と腺毛の有無とを参考にすれば、ノボロギクと間違うことはない。

Three weeds of European origin, *Kickxia elatine* (L.) Dumort., *Chaenorhinum minus* (L.) Lange and *Senecio viscosus* L., have been recently reported introduced into Japan as new aliens. While the first was collected at a site near Narita in Chiba Prefec-

ture in 1992, the other two were found growing in sandy waste sites along the coast of the Bay of Tokyo between Chiba and Tokyo prefectures in 1994.

In addition, *Convolvulus pilosellifolius* Desr. of Mediterranean region, and *Senecio blochmaniae* E.L. Green of the United States were also discovered

growing in sunny waste places in the Kobe and the Tokyo Bay areas in 1994. These weeds may have possibly been migrated into Japan hiding in the cargoes that arrived at these ports from Europe and the U.S.A., respectively

(東京歯科大学)

トウチクの斑入り品 (鈴木貞雄)

Sadao SUZUKI: A Striped Form of *Sinobamubusa tootsik* Makino

トウチクの葉に黄または白の縦じまが入った斑入り品について室井 紹博士は杉本順一著の日本樹木検索誌 (1961) に *Sinobamubusa tootsik* Makino f. *albo-striata* Muroi スズコナリヒラとして命名・発表された。この発表にはタイプ標本が指定されていないため、その学名は裸名である。

トウチクの葉の斑入り品は関東地方より四国・九州まで、鑑賞用としてごくふつうに栽培されていて、誰の眼にもつきやすいので記載しておきたい。

Sinobamubusa tootsik Makino

Form. *albo-striata* Muroi, f. nov.

Folia flavo- vel albo-striata.

Sinobamubusa tootsik Makino f. *albo-striata* Muroi in Sugimoto, New Keys Jpn. Tr. 475 (1961), nom. nud. —— Suzuki, Ind. Jpn. Bamb. 96, 339 (1978).

Nom. Jap. Shima-tochiku.

和名: シマトウチク (新称)

Hab. Japan, Honshu, Chiba Pref., Sakura-shi, Kami-shizu (S. Suzuki 9742, Aug. 28, 1994-holotype in TI).

Distr. Japan. Widely cultivated in Honshu (Kanto District and to the southward), Shikoku and Kyusyu.

(佐倉市 [redacted])